

出身地 広島県三原市  
 生年 一八六八（慶応四）年六月十二日  
 没年 一九三二（昭和六）年十二月三日

花井卓蔵は、一八八五（明治十八）年九月、英吉利法律学校創立と同時に入学し、所定の三年間で全科を修了して卒業した生粋の法学第一期生である。のちに弁護士として「花井の前に花井なく、花井の後に花井なし」とうたわれた彼は、すでに在学中から東京の五大法律学校の学生と教師・卒業生の協力で行われていた連合討論会などを通じて「縦横の快弁を振って名声を博し、都下幾千の学生の間に英吉利法律学校に花井あり」と驚嘆されていたという。また東京大学法学科の機関誌である『法学協会雑誌』の編集に江木衷を補佐して携わり、あるいは卒業後には本学機関誌『法理精華』の編集に従事し、自ら健筆も振るって「花井卓蔵の名は実に雷霆の如く学生間に轟き渡って」いたと中央大学学長の原嘉道は花井の逝去に際し追悼回想している。

その『法理精華』九〇年七月十五日号が発行禁止処分を受けた。江木を初めとする東京法学院の諸講師の引き

学博士の学位が授与された。学位令が定められて以来、実に二十一年、帝国大学出身者以外への初めての博士号の授与であった。これを記念して全学挙げての祝賀会が盛大に催されたが、江木が祝辞で、花井の栄誉であると同時に英吉利法律学校創立以来の本学の発展を象徴する出来事と言い、奥田義人が本学のみならず他の官公私立学校においても類例のないこととその学位授与の意義に注意を喚起した通り、まさに花井は本学を始めとする私立学校の発展を象徴する人物となっていたのである。



法服姿の花井卓蔵

続く民法典批判論文が政府首脳を刺激していたためであるが、直接のきっかけとなったのは花井が匿名で執筆した社説「新法典概評」だった。花井は翌年九月、現在も継続刊行されている『法学新報』創刊に際しても、社説「法学新報発行の主題」を執筆し、格調高く「明法の士、発憤せよ興起せよ、帝国法律統一の為に、婦一のため」と法律家の奮起と切磋琢磨を促している。この『法学新報』こそが、穂積八束の有名な「民法出て、忠孝亡フ」をはじめ、旧民法を施行延期に追い込んだ延期派の論陣の拠点となった雑誌であり、その中心には花井がいたのである。

他方、花井は山田喜之助や渋谷慥爾の法律事務所です訟手続きの實際を学び、卒業後二年にして代言人試験を通過した。こうして在野法曹として活動を始め、のちに扱った訴訟は一万余件と言われるほど精力的であった。

一九〇九年五月、それまでの功績が評価され花井に法

昭和初年にベストセラーとなった『修養全集―立志奮闘物語』という野口英世や高橋是清、橋本雅邦、ステイブソン、フォードなど国内外・各界の著名人三〇人ほどの立身伝を挿絵入りで大衆向けにまとめた本がある。この本には並み居る偉人と並んで「我が国法曹界の巨人」と題して花井卓蔵の苦学物語が収められている。

「一寒村の小学校教員から身を起こし、ついに我国法曹界の権威元老となった花井卓蔵の名は、すでに有名すぎるほど有名である。それにしても二十歳にして弁護士、三十歳にして代議士、更に法学博士、法制審議会副総裁、貴族院議員、勲一等などという華々しい経歴と栄職を持つに至った彼の今日の成功は、火の如き熱情と、負けじ魂と、不撓不屈の努力奮闘の結果であることを見るのが事は出来ない」……こう語りはじめられる花井の物語は「無位無冠で勲一等を得た者は花井卓蔵只一人であるが、彼が法曹界に貢献した功績を思えば当然である、貧しきを悲しむなかれ、自が力の至らざるを悔やめ」と締めくくるこの『修養全集』は、本学あるいは法曹界の象徴に止まらず、まさに模範的な人間像として人々に花井の人物像を示したものであった。